

オリンピックとパラリンピックは どのように作られたか —さまざまな人たちの挑戦



司会：稲垣 伸一
(実践女子大学
文学部英文学科 教授)

今年度の公開講座で英文学科が着目したのが、スポーツを通して世界各国が交流するオリンピック・パラリンピック（オリパラ）。東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会でボランティア検討委員を務める西川千春氏と、本学で意欲的な研究活動を展開する 2 名の講師が講演。さまざまな立場の人たちがどのようにオリパラに携わり現在のよう形にしてきたのかを考え、来る東京 2020 大会の可能性と展望を探りました。

講
演

大会の顔、オリンピック・パラリンピックボランティア —人生最高の 2 週間

今やオリパラの運営に欠かせない存在であるボランティア。その意義ややりがい、活動内容などを、3 大会（2012 ロンドン、2014 ソチ、2016 リオ）でボランティア活動に参加した講師が自らの体験や関係者からのヒアリングをもとに紹介してくださいました。

■ボランティアは 市民としての国の代表

人生は、ある出来事できりと変わる場合があります。私の場合、それは 2005 年 7 月 6 日、シンガポールで行われた IOC の特別総会でした。当時住んでいたロンドンが、2012 年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催地に決定されたのです。当時、イギリスは不況で失業率も高く、国民全体が自信を失っている時期。オリパラを機に国を活性化させ、子どもたちに夢を与えようという目標を掲げて、スポーツ界はもちろん国を挙げて招致活動に取り組みました。私は幼少期からスポーツもオリンピックも大好きだったため、開催地に決まった瞬間、ボランティアに参加しようと決意しました。その頃、通訳の仕事もしていたので、ランゲージサービスのスタッフとして参加することにしました。



講師：西川 千春 氏
(東京 2020 オリンピック・
パラリンピック競技大会組織委員会
ボランティア検討委員)

オリパラにおいてボランティアが担う活動は数百あるといわれます。その中でランゲージサービスは、ある国の言葉を英語に訳して、選手や要人などをサポートする役割です。オリンピック公共放送サービスで取り上げられる選手インタビューの通訳も担当し、卓球女子で日本初のメダルを獲得した石川佳純選手のインタビューに携わるなど、歴史的瞬間に立ち会う経験もしました。

閉会式の時には、組織委員会会長セバスチャン・コーから、ボランティアへ感謝の言葉が贈られました。祝勝パレードでは選手の呼びかけにより、選手のすぐ後をボランティアが歩き、多くの市民から声援を受けました。この時、「選手はスポーツのエリートとしてのイギリス代表だが、ボランティアは市民としての国の代表なのだ」と実感しました。

この時の充実感は感激に堪えないもので、私はその後、2014 年ロシア・ソチ大会、2016 年ブラジル・リオデジャネイロ大会にも、ランゲージサービスでボランティア活動に参加しました。

■国籍も年代も、さまざまな人と力を合わせる経験に

オリパラでのボランティアの経験から、私たちはたくさんのことを学べます。例えば、国籍も年齢も多様な人と接すること。リオ大会ではボランティア 5 万人のうち 1 万人はブラジル国外からの応募者でした。私が所属したランゲージサービスチームにもいろいろな国の人が集まっていました。ロンドン大会ではボランティアの平均年齢が 44 歳、学生からシニアまでみんな同じユニフォームを着て、大会成功という目標に向かって活動しました。

これまでの経験が評価され、東京 2020 大会で私はボランティア検討委員を務めることになりました。ボランティアの面から東京大会をどのように成功に導くか考える時、さまざまな課題に向き合うことになります。1 つは、「ボランティア」という言葉に対し、多くの日本人が PTA 活動や部活動のような「強いられて」やらなくてはならないもの」というイメージを抱いていること。ボランティアというのは本来、自発的な意思で参加するものですが、その理解が浸透していないように見受けられます。また、東京大会自体の目標が曖昧に感じられる、という点も課題です。「目標のためにがんばる」という公共性は、自発性とともなボランティアに必要な不可欠なものです。私が考える東京大会の目標は「日本を世界にアピールすること。日本のイメージが良くなり、各国の人が訪れたいと言う現在は、日本の姿を世界中に見てもらおう絶好のタイミングではないか」と思います。

なぜボランティアに参加するのか。それは楽しいからです。これだけ大きな世界規模のイベントに、スタッフの一員として参加する。役割を全うし、大会を成功に導いた時の充実感や達成感、生涯記憶に残る、素晴らしいものです。年齢を問わず多くの方に、「人生最高の 2 週間」を、ぜひ体感していただきたいと思います。



過去 3 大会で西川氏が実際に着用したユニフォームも展示されました。



会場では、講師 3 名の著書も紹介。

講演

ジェンダーからみるオリンピック・パラリンピック —女性の身体とスポーツ

女性たちはどのようにスポーツに参入し、オリンピックの発展に貢献したのか。また、その過程でどのような障害を乗り越えてきたのか。19世紀後半から20世紀初頭のアメリカ社会を軸に、「女性とオリンピック」との関わりを見つめました。

■女性たちがさまざまな規範を付与されると同時に新たな姿を獲得する場

近代スポーツの要素には「人の身体能力の追求」と「スペクタクル的要素」があります。前者は規範的な身体を提示しその能力に優劣をつけるもので、文化・社会的言説に依存しているといえます。後者には、20世紀以降発達した商業主義やマスメディアが大きく関わっています。

アメリカで近代スポーツが発展した19世紀後半は白人男性の優位性が脅かされつつある時期でした。そんな中、鍛錬し適切に管理された身体を持つことは、白人男性にとってエリートの証ともなりました。その反面、女性のスポーツ参加はかなり困難な状況でしたが、それでもアメリカ女性たちは徐々にスポーツ、そしてオリンピックに参入していきます。オリンピックについては、1920年アントワープ大会に初の女性選手団が派遣され、陸上競技への女性参加が認められた1928年アムステルダム大会でアメリカ代表ベティ・ロビンソンが100m走で金メダルを獲得します。この大会では、過酷な長距離レースを女性に行わせるのはいかがな



講師：佐々木 真理
(実践女子大学 文学部
英文学科 教授)

のかとメディアが論じ、その後長らく女性の800m以上のレースが禁止されることになりました。オリンピックと女性との関わりを見ると、参加を試みた女性たちが抵抗を受け、それにより問題が可視化され新たなチャンスが生まれる、というサイクルが生じていたことがわかります。スポーツは「さまざまな社会的関係、文化、社会的通念を身体に刻印される場であると同時に、それらに抵抗する場でもあり、身体を解放する場でもある」(アン・ホール)という指摘は、まさにアメリカの近代スポーツにおける女性たちの歩みを表しているといえるでしょう。

女性のスポーツ参加について、現在の多くの課題が浮き彫りになっています。例えば、スポーツとマスメディアが結託することで身体表象におけるジェンダー規範が再生産され、拡散していること。また、女性アスリートの体現する力が女性たちのエンパワーメントとして作用する反面、政治的・社会的・文化的問題を覆い隠すものになりかねないことなどです。すべての人が同じフィニッシュラインに立つことがスポーツの目標であるならば、アメリカの女性たちのこのような軌跡は、さらにさまざまな人が参加できるオリンピック・パラリンピックのあり方を考えるひとつのきっかけとなるでしょう。



女性のスポーツ参入を阻む要素でもあったウエアについても解説。

講演

「東洋の魔女」言説

先の東京オリンピックで活躍し、いまだ伝説的存在である「東洋の魔女」日本女子バレーチーム。彼女たちはなぜ「魔女」と呼ばれたのか、そして「東洋」とはどこを指すのか。当時のアメリカ・ソ連(現：ロシア)の状況を踏まえ、興味深い考察が展開されました。

■ソ連が彼女たちを表した言葉には、敬意と称賛が込められていた

1964年の東京オリンピック大会女子バレーボール決勝戦で、ソ連と戦い金メダルを獲得した日本選手たちは「東洋の魔女」と呼ばれました。彼女たちはなぜ「魔女」と呼ばれたのでしょうか、そして「東洋」とはどこにあるのでしょうか。

日本女子バレーボールチームを率いた大松博文は、「魔女」という言葉について「彼らがいる魔女とは、日本人のわれわれが理解しているぶきみな悪い女ではありません。それは人間ではできないようなことができる力をもっている、という意味に使われるものです」と述べています。選手たちをソ連の新聞がどのように取り上げていたのかを見ると、好意的な論調で「Чародейка」と表現していたことがわかります。これは英訳すると「witch」「fairy」です。チャイコフスキー作曲の同名のオペラがある事実をふまえて、私はこの2つに加え、「enchantress」(「enchant/誰かを強く魅了する」の名詞形)を強調したいと思います。彼女たちを指す「Чародейка」を英訳すると、



講師：深瀬 有希子
(実践女子大学 文学部
英文学科 准教授)

「fairy」や「enchantress」という表現があるにもかかわらず、「Oriental Witches / Witches of the Orient」とされます。ここには、冷戦期アメリカにおけるマッカーシズム(witch-hunt)の影響があると考えられます。

では、「東洋(Orient)」はどこにあるのでしょうか。著名な批評家エドワード・サイードはオリエンタリズムを、「西洋に対立する概念として東洋を前提とし、西洋と東洋とのあいだに優劣をつけて、支配と服従の関係を作り出す仕組み」と定義しています。浜由樹子はロシアにおけるオリエンタリズム研究の中で、「[「オクシデント(西洋)」と「オリエント」の混じり合うロシアにおいて、両者は明瞭な対立関係にあるわけではない]と述べています。つまりロシア(ソ連)は、時に西洋であり東洋でもある、そういう立ち位置の国であり、そういった国が日本人女性を「Чародейка」と呼んだ時に、そこにどのような感情が込められていたのかを考える必要があります。

「東洋」「魔女」という表現には、このような背景があります。前述の、大松の「魔女」の記述を改めて読むと、彼は「Чародейка」が本来持つ意味をかなり正確に理解していたのではないかと、むしろ多くの日本人がアメリカ側の視点でその言葉を歪曲して受けとめてしまっているのではないかと、思われます。それでも私たちはまだ彼女たちを「witch」と呼ぶか、そしてソ連が崩壊した現在、「オリエント」をどう捉えるかを考えるのに、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は有効な場になるのではないのでしょうか。



常磐祭の中で行われた本講座には、幅広い年代の方が参加されました。

参加者アンケートから (抜粋)

- 西川先生のお話に感激しました。東京オリンピック・パラリンピックでも、多くのボランティアの方に同じ経験をしてほしいと願っています。(女性・70代以上・本学卒業生)
- 女性のスポーツの始まりや、「魔女」という表現について知ることができて面白かったです。(女性・20代・本学学生)
- タイムリーなテーマ・ユニークなアプローチ法で良かったです。聴講して、ボランティアに参加してみてもいいかも、と思いました。(女性・60代・渋谷区内在住勤務)
- オリンピック・パラリンピックをテーマに、いろいろな観点からお話を聞けてとても有意義な時間となりました。(女性・20代・学外)